

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 165, 2014

VIEW 展望

日本映像学会第40回大会——沖縄大会に寄せて／仲本賢…2

INFORMATION 学会組織活動報告

研究企画委員会…3 総務委員会…3 支部・研究会だより 東部支部…4

アナログメディア研究会…4-6 映像表現研究会…10-11 関西支部…12

中部支部…12 ショートフィルム研究会…13-14 日本映像学会第40回大会第1
通信…15

REPORT 報告

東部支部第7回クロスメディア研究会／李容旭…6-9

FROM THE EDITORS

編集後記…15

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第165号」2014年1月1日発行
発行人：豊原正智 編集担当／総務委員会：古賀太（委員長）・遠藤賢治・伏木啓・
末永航・石坂健治・小出正志・仲本賢

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

日本映像学会第 40 回大会

—— 沖縄大会に寄せて

仲本 賢

今年の日本映像学会の大会は初回から数えて 40 回目を迎え、ついに日本の中では辺境ともいえる沖縄で開催される。といえば言い過ぎのような気がするが、地元出身で当大会実行委員の私がいうので許していただきたい。

さて、映像を学問としてとらえている私達が沖縄を想像するときに、いったいどんな切り口でこの地方を考えられるのであろうか？ほとんどの人たちが住んでみたことがなく、テレビなどのマスコミや、書物、あるいは映画などでその情報を得る。旅行や短期の滞在はそれを追体験するにすぎない。とりわけ写真やビデオ、フィルムなどの映像は切り取られたものであるから、いうまでもなくその情報発信者が見せたいと思った画像であり、また意図しないまでも見たいと思う側が自由に選択した形で記憶に残る。

このことは至極当たり前のことであるが、いま改めて考えることが、沖縄や日本全体やあるいは世界を切り取ることの意味を再確認する良い機会であるように感じるのである。

私なりに近代史をひもときながら、沖縄在住の者として映像になった沖縄を振り返ってみたい。

明治以前の沖縄（琉球王国）は、廃藩置県と日本への統合が行われるまで、半分未開拓の、あるいは強大な中国文化圏と日本文化圏の狭間にある小国であった。長い間中国へ船を出して使者を送りながら繁栄し、やがて薩摩の侵攻を受けることになる。この頃を表している映画や映像のほとんどは、諸島を武力で制圧しながら王妃（キコエオオキミ）を中心とするシャーマンの力の及ぶ範囲で、暴力と霊力の支配する土地であった。（「琉球の風」NHK / 「テンペスト」NHK 参照）

明治以降では、日本の他の地方がそうであったように、日本政府は政治的な中央集権に加え、文化的な中央集権を進めていった。共通語教育の普及は、方言を駆逐し、全国民の意思疎通をスムーズにし、教科書によって国の成り立ちから道徳までを教育し統一した。春に桜の咲かない沖縄の県民が、サクサク、サクサクのはめでたい春の出来事だと教えられた。ちなみに沖縄の桜は 2 月の中旬に咲き、そして散らない。しかしながらこの日本語の統一は日本の近代化には欠かせない行程であった。（「日本のことば」NHK。この頃のことを題材にした映像作品は意外と少ない）

太平洋戦争から日本復帰までは、過酷な戦争、屈辱の敗戦、占領と続くが、その頃を生きても多いため、その記録映像とともに創作映像も数多い。この頃の沖縄県民は忠義を尽くしたり、反社会的であったりしてアクティブである。また占領下では暴力的でもある。これは「仁義無き戦い」の主人公たちに似ている。一部の文化人（鎌倉芳太郎など）や芸術家（岡本太郎など）たちが失われた日本の原風景を求めて写真や映像をこぞって残そうとした時代でもある。（「激動の昭和史 沖縄決戦」岡本喜八、「ウインタマギルー」高嶺剛、「オキナワの少年」新城卓、「沖縄やぐざ戦争」中島貞夫など）

日本復帰（1972）から現在（2014）までは、一番変化の大きい時代であろう。復帰の前後、長年のアメリカ統治に辟易していた県民は、独立よりも当たり前に日本復帰を選択し

た。それからしばらくは「本土並み」を合い言葉のようにして日本化を推し進めていった。沖縄海洋博覧会（1975）の前後では、少しだけ自分たちの周辺の海的美しさに気がついたりしたが、その経済的な貧しさ（本土との格差）故に、沖縄らしいものを忌み嫌い、豊かさを求めてパスポートのいらなくなった本土に渡った者が多かった。東京オリンピック（1964）、大阪万博（1970）の豊かな日本の映像を見ながら、やがて時代はアイドル全盛期、テレビのキー局から流れる山口百恵や西城秀樹に憧れた。南沙織などの県出身のアイドルも出たが、少数派であった。沖縄の若者はひたすら日本のモノに憧れたのである。都会に出て行った沖縄の若者達が、自己イメージの低さに驚愕し、ある者は暴徒化し、打ちのめされて身分を隠したのはこの時期の特徴であろう。

ところが 70 年代後半にこのイメージが一変する。日本航空と全日空の大手航空会社 2 社が、夏の沖縄キャンペーンを一大事業として展開し始めた。このとき多くの健康的な水着キャンペーンガールを排出、やがてそれはイケメンアイドルや人気マンガキャラクターに移り変わっていく。夏のキャンペーンが水着の女子なら、冬はプロ野球のキャンプであろう。80 年代に始まった沖縄キャンプは、冬の練習に最適な気温というだけでなく、航空会社とタイアップした一大キャンペーンでもあっただろう。

ここからは見えざる神の手も加わって沖縄人気に拍車がかかる。沖縄アクターズスクールが安室奈美恵、ダパンプをはじめとするアイドル歌手を輩出、同時に沖縄関係のテレビドラマが数多く作られ、仲間由紀恵「TRICK」（TV 朝日、2000）、国仲涼子「ちゅらさん」（NHK、2001）、新垣結衣などの女優とイメージを量産している。

以降、2000 年代に入ってから、全国規模のイベント、沖縄国際映画祭（2009 ～、吉本興業の協賛するコメディアンを中心とした映画祭）など、吉本芸人が多くの映画を発表したりして、沖縄のメディアへの露出は急激に増加した。

これらの映像のほとんどは、他者がイメージする沖縄のあるべき姿で、政治的で商業的なキャンペーンと、それを歓迎する県民との狭間に起こったいびつな化学変化である。

そうでなければ、どこまでも美しい青い海や白い砂浜や、純朴で優しい人々は出てこないはずである。またそうでなければ、実は沖縄は気象的には全国一晴れの少ないどんよりした地域で、ほとんどの海岸が護岸で補強され、戦いながら受け入れながら軍事基地の周辺で平和を辛うじて保っている、緊張感のある場所であることを見逃すはずがない。

日本国民にとって国内である沖縄は、ハリウッド映画の表現する奇妙な日本ほどではないが、その移動距離と同じだけの違和感が存在するということが、容易に想像できるだろう。そしてそこに発生する幻想は、お互いの距離でもあることを改めて自覚するのではないだろうか。

（なかもと まさる / 日本映像学会第 40 回大会実行委員長、
沖縄県立芸術大学）

研究企画委員会

相内啓司

研究企画委員会からのお知らせ

研究企画委員会から研究会活動にかんする3件のお知らせ。

1: 研究会登録申請について

研究企画委員会は引き続き2014年度の目標として、本学会に所属する研究会活動のさらなる活性化を奨励します。

あわせて、新規の研究会の発足を奨励するとともに、有意義な研究会活動を支援し、研究会活動の成果の共有化を図ることを具体的な課題としています。

2013年5月11日の理事会において、その目標の実現に向けて研究企画委員会では、既存の研究会の活動実態を把握するとともに、研究会活動の統括をなうことが決定されました。

2013年度中は目標達成にむけ、これまでの研究会の所属関係を整理し、原則的にすべての研究会はあらためて各支部に登録申請書を提出し、承認を得ることになりました。

これにともない、理事会の直属機関である研究企画委員会に直属していた4研究会についてもその所属関係が解消され、当該の研究会が研究会活動の継続を希望する場合は、あらためて各支部に登録申請を行ない、承諾を得ることが必要となりました。

*登録申請を検討中の研究会は代表者の所属する支部、または所属する研究員が多数を占める支部に登録申請をおこなってください。なお、研究会内にさらに支部会などを組織する場合は、必要に応じて各研究会内部で調整をおこなってください。

*研究会に配分される運営費は登録する支部予算の中から支給されます(配分額については各支部の裁量による)。

*研究会の申請時期は春期(4月末)、秋期(9月末)の年2回とします。

*過去2年間以上にわたり実質的な研究会活動が見られない研究会は、研究活動に対する休止の正当な理由、存続の必然性の有無、研究会を構成する会員の意欲および、今後の研究活動の継続への意思などが問われます。

研究活動の休止の理由などについて十分な説得力が得られない場合には研究企画委員会・理事会の審議を経て本学会が公認する研究会としての承認が得られない場合があります。

なお、その対象となった研究会は、2年間同一の会員が主宰する同名の研究会として申請することができなくなります。

◎「研究会登録申請書」について

新規に発足を希望する研究会、および2013年度中に各支部への登録申請が済んでいない既存の研究会の主宰者は学会ホームページに掲載の記入票(研究会登録申請書.xls)に、必要事項を記入のうえMailにて映像学会事務局・支部宛(登録を希望する支部)に登録申請を行ってください。(電子メールの場合の送信先アドレス: jiasias@nihon-u.ac.jp)

*なお、「研究会登録申請書」の記入内容については学会ホームページに掲載の記入票をご覧ください。

2: 2014年度研究会活動費助成の公募について

●研究会活動費助成の公募

2014年度、本学会は映像にかんする研究・活動の活性化を図るために、研究会が企画・運営する研究活動にたいして研究会活動費助成の公募をします。

有意義と期待される研究活動や、継続的な研究活動を続けている研究会、および新規発足の研究会による研究活動の奨励を目的とし、研究会活動費助成の公募をします。

応募された「研究会活動費助成申請書」については審査委員会による研究・活動計画内容、実施の実現性などについて厳正な審査のうえ、助成対象となる研究・活動計画を決定します。

なお、活動休止中の研究会については、研究会活動の再開計画の立案、組織の再編成案の策定のうえ応募を検討されるか、あるいは活動の停止・解消等の検討を充分行なうことが望まれます。

●応募期間: 2014年2月1日~3月31日

●応募資格: 各支部に所属する研究会の代表者

●公募内容: 研究会が企画・運営する研究会活動費として以下の2種の助成金を交付します。企画内容によってどちらかを選択して応募してください。(ただし、応募状況により予算額の調整を行なう場合があります)

予算額A: ¥150,000 (2件程度)

予算額B: ¥80,000 (3件程度)

(総額¥500,000~540,000程度)

●審査結果の通知: 2014年5月中旬

●助成金の交付: 審査結果にもとづき助成金額を通知します。原則として年度末に領収書と引き換えに交付します。事情により事前の交付についても柔軟に対応する用意があります(総務扱い)。

●研究会活動の結果の報告書の提出: 年度末(学会報、大会などでの公表)

●研究会活動費の運用についての報告: (総務へ提出)

*なお、申請内容に食い違いが生じたものや、実施できなかったものについては報告と、助成金の返還を求める場合があります。

◎「研究会活動費助成申請書」について

応募する研究会の主宰者は学会ホームページに掲載の記入票(研究会活動費助成申請書.xls)に、必要事項を記入のうえMailにて映像学会事務局・研究企画委員会宛に送ってください。(電子メールの場合の送信先アドレス: jiasias@nihon-u.ac.jp)

*なお、「研究会活動費助成申請書」の記入内容については学会ホームページに掲載の記入票をご覧ください。

3: 2014年度研究会活動の報告

各研究会は2013年度中に行なった研究会活動の結果の報告書の提出が必要です。

●研究会活動の成果の共有化を図るという観点から、各研究会は研究会活動の結果を報告書として提出することが必要です。

*とくに研究会活動助成金を受けた研究会は会員に対して、その研究成果、活動運営費の使途・決算書を公表する義務があります。年度末の学会報への掲載に合わせて、研究成果については大会での公表が望まれます。

*学会報に報告書が掲載される場合は、文字数など学会報の規定のフォーマットに従って報告書を作成してください。

*大会で研究発表される場合は大会運営委員会の指示にもとづいて行なってください。

●研究会活動費の運用についての報告は決算報告書に加えて領収書を総務へ提出してください。

以上

(あいうちけいじ/研究企画委員長、京都精華大学芸術学部)

総務委員会

古賀 太

4月に予定されている第21期役員選挙に関して、以下の改革案が理事会でおおむね合意をみています。

1. 全体に役員数の割合を減らす。
2. 支部の最低役員数は2名とする。
3. 会長指名においては、会員の女性比率に比した理事の人数を考慮する。

この方向に対してご意見のある方は、事務局までお寄せください。

(こがふとし/総務委員長、日本大学芸術学部)

支部・研究会だより
東部支部

奥野 邦利

東部支部報告と計画について

東部支部につきましては、支部所属の研究会の申請が続々と届いており、研究企画委員会によって進められた制度変更が機能してのことと実感しています。次号会報までには、第二回となる東部支部幹事会を執り行い、支部研究会の活性化と共に、新たな東部支部の姿をお示しできるよう努めてまいります。前号でもお示しましたが、支部活動費の運用については、以下のことをご確認ください。

(1) 東部支部における研究助成費使用規定について

東部支部研究助成費については、研究企画委員会にて検討され、理事会にて承認された新たな組織形成に準じながら運用して行くことが確認されました。東部支部の所属を希望して申請承認された研究会については、研究会代表に東部支部研究助成費使用規定を提示しますので、それに基づいて公平且つ有効に利用されることになります。

(2) 東部支部における運営費使用規定について

現在の東部支部の運営状況を鑑みると、運営費については無理に予算消化することなく、これを柔軟に使用し、残金は年度ごとに学会本部へ返金することで、学会全体の活動費として有効に利用されることを希望しています。なお東北、北海道地区への活動補助については、引き続き検討をしています。

(おくのくにとし/東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部映画学科)

アナログメディア研究会

太田 曜

アナログメディア研究会報告と計画について

アナログメディア研究会は映像に於けるアナログメディア、とりわけフィルムなどのメディアの研究と、そのメディアで作られた作品の研究などを目的に2013年10月1日、日本映像学会から正式に承認され、設立された。

研究会代表 太田曜
研究会運営構成員 末岡一郎 西村智弘 川口肇 水由章 (研究企画委員会に運営構成員として追加申請中)

研究会事務局
阿佐ヶ谷美術専門学校
住所：〒166-0011 東京都杉並区梅里 1-3-3
TEL.03-3313-8655
担当 末岡一郎

アナログメディア研究会 Facebook ページ
<https://www.facebook.com/analogmedia?ref=hl>

■活動報告■

2013年の春頃より、アナログメディア研究会準備会として映像表現研究会との共同で行ったものを含めて、以下のような事業を行った。

- 1 :
- 4月30日 なかのZERO ギャラリー
改造8ミリ映写機5台を使った南俊輔ライブパフォーマンス上映
- 上映作品
Optical printer projector
8mmfilm/ カラー / サイレント /10分程度 /2013
- Optical Sound
8mmfilm/ カラー / サウンド /10分程度 /2012-2013

東部支部アナログメディア研究会報告



上映後にシンポジウム



南俊輔、宮田徹也 (映像、美術、ダンス、研究)、末岡一郎 (実験映画)、太田曜 (実験映画)

改造8ミリ映写機5台を使った南俊輔ライブパフォーマンス上映

4月30日(火曜日) 19時から

入場無料

なかのZERO 展示ギャラリー (本館地下)
東京都杉並区中野2-9-7
TEL. 03-5340-8000(代)

http://www.njoesnet.jp/access/zero.html

■上映作品

Optical printer projector
8mmfilm/ カラー / サイレント /10分程度 /2013

Optical Sound
8mmfilm/ カラー / サウンド /10分程度 /2012-2013

(1) 上映後にシンポジウム
主 催 末岡一郎 (映像、美術、ダンス、研究)
共 催 アナログメディア研究会 準備会 代表 太田 曜 日本映像学会
〒166-0011 東京都杉並区梅里1-3-3 阿佐ヶ谷美術専門学校 TEL.03-3313-8655

■次号アナログメディア研究会 (準備会) のお知らせ

5月10日 会曜日 18時から
開催場所: 阿佐ヶ谷美術専門学校
8mm, 16mm 映画作品上映とシンポジウム

Image Arts and Sciences 165 (2014) , 4-6
 東部支部アナログメディア研究会報告

2 :

5月10日阿佐ヶ谷美術専門学校 5 2 1 教室
 8mm 16mm フィルム作品上映 シンポジウム

上映プログラム

☆ 8mm FILM プログラム 約50分 ☆
 森岡千織 「リンスインシャンプー」5分
 新井潤峰 「forlife ~梅竹松」10分
 清成晋太郎 「のがれゆくところ」7分
 石川亮 「undercurrent」5分
 ムラカミヒロキ 「活<断>荘」5分
 田中可也子 「ひかりつむぎ」3分
 日景 明夫 「影をなめすと」6分
 古里麻衣 「眼包み」5分
 徳永彩加 「センター×センター」3分

☆ 16mm FILM プログラム 約50分 ☆
 水由章 「水光色」7分
 西村智弘 「青い歩道橋」7分
 末岡一郎 「Ein Sommer in Deutschland」7分
 宮崎淳 「BORDER LAND」15分
 太田曜 「根府川」6分
 伊藤隆介 「当映画館にて上映されます」5分
 大島慶太郎 「blur」6分

☆ シンポジウム ☆
 波多野哲朗 (映像研究/映像作家)
 水由章 (実験映画/プロデューサー)
 末岡一郎 (実験映画)
 太田曜 (実験映画)



3 :

6月2日 東京造形大学 2 - 205 教室
 日本映像学会 第39回大会 作品上映

5月10日阿佐ヶ谷美術専門学校での16mm プログラムの上映

4 :

6月28日 阿佐ヶ谷美術専門学校 5 2 1 教室
 能登勝 16mm 自家現像&自家製プリント映画特集

上映プログラム

上弦の月 2009 16分 5秒 579feet 初上映
 夢代八 2013 9分 35秒 354feet 初上映
 最新となる夢代七 夢代六も準備中

Peachy film 能登勝&関根博之 コラボレーションライブ上映
 能登勝の16mmと関根博之の8mm がライブ上映でコラボ



トーク
 能登勝の映画制作について 聞き手 末岡一郎 ほか

5 :

9月28日/10月12日 阿佐ヶ谷美術専門学校 5 2 1 教室
 廃墟の魔術師 関根博之の廃墟8ミリ映画

■第1回 上映とトーク 9月28日土曜日 14時~17時
 ☆『U.O』1992年 シングル8 22分
 ☆『U.O 5』1997年 シングル8 40分
 ☆『石のしずく』1997年 シングル8 60分
 ★トーク 8ミリ、自主制作、自主上映
 関根博之 水由章 (実験映画、プロデューサー)





■第2回 上映とトーク 10月12日土曜日 14時～17時

- ☆『山王ホテル』1990年 シングル8 14分
 - ☆『六本木の廃墟』1992年 シングル8 55分
 - ☆『MAYA Vol 2』2002年 シングル8 50分
 - ★トーク 8ミリ、アナログメディア/デジタルメディア
- 関根博之 西村智弘 (映像・美術/評論・研究)



■ 活動計画 ■

- 1:
2014年1月18日 阿佐ヶ谷美術専門学校 521教室

実験映画のアーカイブについて (仮)
講演 とちぎあきら (東京国立近代美術館フィルムセンター)
聞き手 西村智弘 (映像・美術/評論・研究)

- 2:
2014年3月1日 UPLINK FACTORY
Recent American Experimental Films (仮)
N.Y.在住の実験映画作家 西川智也 キュレーション アメリカの最新フィルム作品

西川智也 プロフィール
ニューヨーク州立大学ビンガムトン校 (ビンガムトン大学) 助教授。2007年より映像作品のキュレーターとして活動を始め、恵比寿映像祭、[+] (プラス)、アナーバー映画祭、ドレスデン短編映画祭、サンフランシスコ近代美術館、エコ・パーク・フィルムセンター等で上映プログラムを紹介した。2008～10年までアメリカの実験映画配給会社「キャニオン・シネマ」の理事を務め、2010年にクアラルンプール実験映画祭 (KLEX) を現地の作家、キュレーターと設立し、2013年よりニューヨーク州ジョンソンシティで開催されている映像祭「TransientVisions」のキュレーターを務める。
<http://www.tomonarinishikawa.com>

以上
(おおた よう/アナログメディア研究会代表、映像作家)

クロスメディア研究会報告

李 容旭

第7回クロスメディア研究会の研究発表を下記のごとく開催しました。

開催日時: 2013年11月2日 (土) 14:00 - 18:00

開催場所: 京都造形芸術大学芸術学部 教室 A11

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学芸術学部

<http://www.kyoto-art.ac.jp/info/about/access/>

後援: 京都造形芸術大学

研究発表は質疑応答や意見交換などで18:00ごろ終了しました。当初の予定より遅くなりましたが研究者同士に刺激し合う充実した発表になりました。発表会終了後牛田あや美会員の案内により京都造形芸術大学芸術学部校舎の見学会がありました。11月3日 (日) は京都国際マンガミュージアムの見学会がありました。

以下発表タイトル、発表者、発表概要です。

実写とアニメの融合の行方

森本 純一郎会員 (東京工芸大学講師)



1. 緒言

映像の媒体が、フィルムからデジタルに移行することによって、かつて明確に区別されていた実写とアニメーションは、その境界を曖昧にしてきた。それは、単にデジタルとアナログという二項だけでなく、映像の作り手の心理にも変化があったと考えるべきなのだろう。撮影するとはどういう意味があったのだろうか。動きを作り出すとはどういうことだったのだろうか。映像芸術における作り手の意識の方向性。それが、実写をアニメに近付けたのか、アニメが実写を凌駕してしまったのか。例えば、モーションキャプチャーで動きを獲得するCG、在ってはならないものを消され、欲しいものを合成された映像。現代の映像とは、そうした混沌の中にあると言える。また、両者の境界線上で起きている越境表現は、映像概念をどう揺り動かしているのだろうか。本稿は、その境界線上に現れた識閥の拮据をもとに、「実写」と「アニメ」の融合が何処に向かっているのかを論じていく。

2. “不気味の谷”の出現とその超克

“不気味の谷”とは、森政弘氏が、1970年に発表した説である。「工業用ロボットより、おもちゃの人型ロボットの方が親しみやすい。ところが、それ以上人間に似ると、“動く死体”を見たかのように気味悪く感じる。だがそこを乗り越えて、本物と見分けがつかなくなれば、気味悪さは感じようがない。つまり、人間にある程度似た姿と、見分けがつかなくなるまでの間に、親和感が大きく落ち込む“不気味の谷”がある」(『Energy』、7巻、4号、エッソスタンダード石油(株)、1970年、33-35頁) というものである。アニメーションが、CGIとして進化を始めた瞬間から、この現象は大きな問題となった。

アニメーション効果が、映像の特殊効果として取り入れられた例は古くから散見される。映画だけでなく、例えば、『プロレスの星 アステカイザー』(永井豪 石川賢原作 NET (テレビ朝日)、円谷プロ 1976年 アニメーションパート 土田プロダクション) などを見ると、実写とアニメの合成が試みられている。実写でのシーンに加え、必殺技のシーンはアニメーションに突然変わるという奇妙な作品であるが、特撮ヒーローが勃興した時期に、アニメーションを使った特殊効果としては、異彩を放っている。先に述べた“不気味の谷”は、この作品では見られない。「アニメである」ということに疑いがなく、キャラクターを“絵”として認識できるからである。

3. モーションキャプチャーと実写映像

嘗て、視覚効果 (Visual Effects, VFX) は、特殊効果 (Special Effects, SFX) の中の一つの効果としてその他の効果と同一視されていた。“デジタルSFX”などと呼ばれて、区別されるようになり始めたのは、デジタル技術の向上が著し

くなってからのことである。現在では物理的特殊効果（Physical Effects, 爆破、弾着、操演 etc.）とは区別されている。

例えば、『カラー・オブ・ハート』（ゲイリー・ロス 1998）、ヤサントリーの“プレミアムモルツ”CMシリーズのように、映画における彩色技術の再現などは、デジタル技術ならではの視覚効果としての好例であろう。

また、アニメーション作品として公開された『ウェイキング・ライフ』（リチャード・リンクレイター 2001）などもロトスコープの応用としてのデジタルペイントという意味で興味深い。アメリカのアニメーションは、ロトスコープを初期から使っていたことから、影を写し取ることからスタートしたと言える。実際の俳優の演技を絵に置き換えるという作業にそれほど抵抗がないのはそうした背景があると考えられる。最近、テレビゲームを中心に使用頻度が高まってきている“モーションキャプチャー”を見ても、ロトスコープの発想が色濃く反映していると言える。“モーションキャプチャー”は、CGのキャラクターに顔の表情を移植するために用いられた。『ロード・オブ・ザ・リング』（ピーター・ジャクソン）のシリーズや同監督の『キングコング』（2005）がそれである。

ただ、この試みには件の“不気味の谷”が大きな口を開けて待っていた。ロバート・ゼメキス監督が、2007年に制作した『ベオウルフ 呪われし勇者』がそれである。パフォーマンス・キャプチャーと称して撮影されたこの作品は、『ポラー・エクスプレス』（2004年）で試作した後の作品として公開された。全編に亘ってCGキャラクターで作られていた作品にも関わらず、「実際の俳優と合成した中途半端な作品」として認識された。実際には、俳優の演技を取り込み、CGキャラクターに全面的に移植した作品であったので、その是非が分かれた。「アニメである」と呼べるのが問題になったのである。つまり、現代における“不気味の谷”の先端的な問題となったのである。俳優の演技の上にアニメを被せる必要はあったのか。もし、アニメと呼ぶならリアルであり、リアルであるからこそ不気味である。一線を越えた時に現れる谷が、再度大きな口を開けたのである。

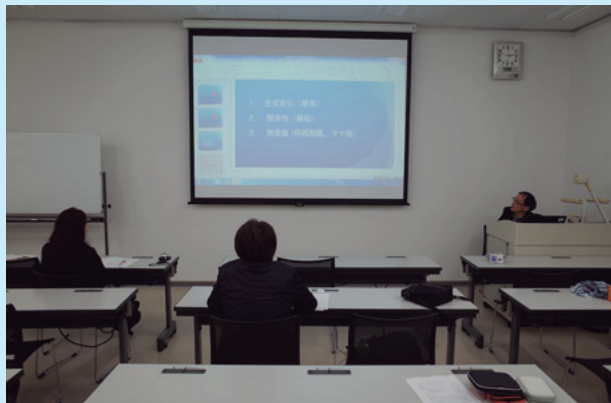
4. 洞窟の比喩

映像が、プラトンのいう「洞窟の比喩」に負うところが大きいとするならば、現代のCGIというのは、その中に登場する「アイデア界にある実体」に近いのではないだろうか。嘗ては、撮影という行為を通して、フィルムに閉じ込める。映像は、字の如く「影を撮る」行為によって成り立っていた。デジタルの時代になって、映像は撮影をせずに生み出せるものへと変貌している。“不気味の谷”を乗り越えたところに出現するCGIは、もしかすると「アイデア界の実体」として見られるようになるかも知れない。

テレビアニメなどを見ても『プリキュア』シリーズのエンディングパートでは、実際の振付師が振付けた（それを取り込んだ）キャラクターのダンスが流れている。まだまだ一部であり、多くは手書き（デジタルペイントではあるけれど）の日本のアニメにもその流れが登場し始めている。これによって、日本人の次世代以降、モーションキャプチャーに対する恐怖は薄れていくのではないだろうか。

押井守作品を“識閥”という言葉を用いて語るなら、「実写の生臭さがなく、アニメの作り物臭さがなく」ものを目指しているといえる。虚構と現実の境界線上に広がる領域。それを“識閥”と彼は呼ぶ。「実写」と“アニメ”の融合の行きつく先は、この“識閥”の世界なのではないだろうか。

観察する自己変容：ジョン・ケージから一乘法界図へ
河合 明会員（サウンドアーティスト）



「理性・意識・分節」を基本とし主観的なエクリチュール主義の音楽に対して、ジョン・ケージは「唯音を聴く」ことで、自己意識を自我から非我へと導いた。このようなケージの試みを基にさらにそれを超える方法はないか。そうした模

索の結論が「瞑想」であった。瞑想は自我による固定観念や先入観で張り付いた自分の意識のネットワーク（関係性）を変化させる方法といえるのである。瞑想はインドのヨーガの修行方法が源であるが中でも「止観の方法」と言われるウィパッサナー瞑想に注目し、その方法と華嚴経の「一乘法界図」を融合させて制作したのが「一乗音界図」である。

ウィパッサナー瞑想は、歩いているときに、「歩いている」「歩いている」、音を聴いている時は「聴いている」「聴いている」と心や身体に生じた現象を言語化し、感覚の一つ一つに言葉を貼りつけ（ラベリングして）実況中継することで、自己を観察し客体化していく。その場合、言葉のシニフィアンとシニフィエとの関係を固定するのではなく、唯単にシニフィアンとして発するのである。たとえば動画は動いているように見えても、実際は一つ一つの静止画が連続することで成り立っているように、その一つ一つに「気づく」のである。

言語によって、心を対象化することによって、自己と同一化している感情や思考との距離をとる。それはまた「無常」に気づくことでもある。そうすれば外界の刺激に対してすぐに感情的に感応するという一連の流れがなくなり、たとえば会社で上司に「やめちまえー」と言われてもそれに対してすぐ怒りが生じることなく冷静でいられるのである。

さらに一乘法界図を用いることで、一つの音に集中すると共に全体（部分と全体、前景と後景）に目を向けるゲシュタルト構造を意識する。それはちょうど、人ごみの雑踏の中で歩いている時、ある一人だけを見ていると、他の人にぶつかってしまうので全体のバランスを無意識にとる行為に似ている。換言すればオートボイエーションという自己の内部（神経系）、とアフォーダンスという自己の外部（環境系）の両者が相互に関係し合い補完し合っているようなものである。

0. メシアン作品における時間の表現について（一）

～『鳥のカタログ』（1956－58）を中心に～

齋藤 恵氏（大妻女子大学）



1 研究の目的

20世紀を代表するフランスの作曲家オリヴィエ・メシアン Olivier Messiaen (1908－92)のピアノ作品《鳥のカタログ Catalogue d'oiseaux》(全7巻全13曲) (1956－58) のスコアの序文や本体に記された時間に関する表記に着目して、各曲の構造や素材について検討しながら、メシアンの大広大な音楽宇宙の一端を明らかにすることを目的とする。

2 研究の内容

メシアンのオルガン作品を中心とした発表者のこれまでの研究の中から、時間的推移を感じられる作品《二枚折絵（二連画）Diptyque》(1930)、《死と生との闘い Combat de la mort et de la vie > (1939)、《マгдаラのマリアに現れた復活のキリスト L'apparition du Christ ressuscité à Marie-Madeleine > (1984) を探り上げて、これらの作品の宗教的な主題と構造を再考した上で、《鳥のカタログ》の中で時間的推移が克明に感じられる2つの曲、第4曲《カオグロヒタキ Le Traquet Stapazin > と第7曲《ヨーロッパヨシキリ La Rousserolle Effarvatte > にアプローチしてゆく。

3 研究の方法

《カオグロヒタキ》と《ヨーロッパヨシキリ》の2つの曲をそれぞれのスコアに示された時刻を一つの手掛かりとして分析する。前者は7つの部分とコーダ、後者は導入部と7つの部分、そしてコーダに分けられる。たとえば《カオグロヒタキ》の第4部は「午前5時（日の出）、第5部は「午前9時」（高く昇った太陽）、第7部は「午後9時」（日没）、コーダは「午後10時」となり、《ヨーロッパヨシキリ》では導入部：午前0時・午前3時、第1部：午前3時、第2部：午前6時（日の出）、第3部：午前8時・午後0時、第4部：午後5時、第5部：

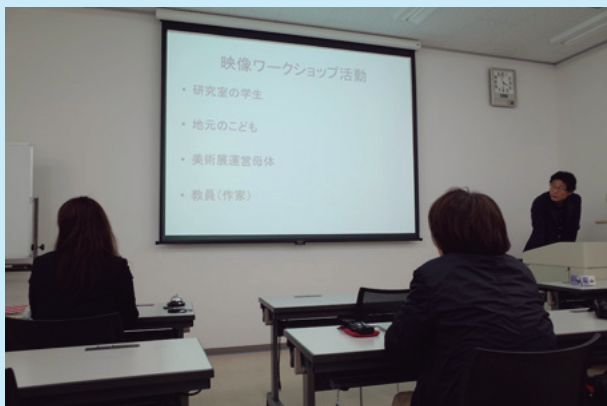
午後6時、第6部：午後9時（日没）、第7部：午前0時、コーダ：午前3時となる。

4 研究の結果

＜カオグロヒタキ＞と＜ヨーロッパヨシキリ＞の2曲共に興味の中心は「日の出」と「日没」の音楽が現れる所にあると考えられる。一日の中で「日の出」と「日没」の頃は日の光や色彩の変化と共に「鳥の歌声」が最も美しく聴かれる重要な2回の時でもある。とくに＜カオグロヒタキ＞では「日の出」の音楽はこの曲のほぼ中央に現れ、＜ヨーロッパヨシキリ＞では「日の出」の音楽は最小音から最強音まで、数回に分けて印象的に現れる。キリスト教を主題にした芸術作品の中で、「日の出」は「キリストの復活」と結びつく時であり、主要な題材の一つに数えられると言えよう。「鳥の歌声」をはじめ、自然の風物を中心的な素材にして作られた曲集《鳥のカタログ》は一見して自然主義的な作品のように見えるが、その根底には深淵なキリスト教の思想が横たわっている。

子供たちとの映像ワークショップ活動を通してみた映像表現の可能性について

李 容旭会員（東京工芸大学）



1 研究の目的

李の研究室では2011年から伊豆の大島や2013年は福島県のいわき市で子供たちとの映像ワークショップを進めている。研究室の学生らと地域の子供が力を合わせて映像づくりを試みたわけだが、結果的にでき上がったのは地元を紹介するプロモーションビデオ。この何年間のワークショップのプロセスを紹介しながら成果や課題などを検討することを目的とする。

2 ワークショップのプロセス

2-1 波浮港国際現代美術展での活動

2011年、李が伊豆大島で開催された波浮港国際現代美術展に作家の立場で参加したのをきっかけにワークショップは始まった。美術展運営委員会が母体となって以後3年連続して開催した。活動は研究室の学生ら（10-15人）が主体になって地元の小学生、中学生、高校生と一緒にグループ分けをして企画から撮影、編集、発表を五日間行った。

各グループごとに地元の子供と話し合いをしながら島の紹介のテーマ、内容など考えてもらい絵コンテなどを作成、全体発表をし、二日間撮影、二日間編集、発表の順にすすめられた。

2-2 「アートミーティング2013」での活動

田人での活動は研究室の学生4人と地元の小学生2人。田人公民館で行われた。カメラをもったことがなかったということなのでまずカメラで何かを撮影してみるから始めて子供たちの希望で通っている小学校やよく遊ぶ川などを撮影。研究室の学生らと一緒に編集し公民館で地域の方へ公開発表した。

3 成果

研究室の学生らには教育的な効果が期待される。普段大学内での映像の勉強が実社会のなかでどのように役に立つのかを体験させることはわずかしい。このような具体的な制作活動を通して学生らの制作意欲向上と映像作り実感を持てる事ができる。一緒に制作に参加してくれた地元の子供たちには、映像への興味をもたせ、映像リテラシーの修得のきっかけを提供できた。また地元を紹介するビデオ制作であることで地元への関心を高めるきっかけや話題の提供ができた。

4 課題

1. 映像に関する知識や技術を修得している研究室の学生と子供たちとの協同において作品のレベルをどこまで追求していくかは毎回課題になっている。最終的に地元で公開することを前提に制作することで短い日程では完全完成に至らない場合が出てくる。ワークショップ終了後大学にもどり後処理により映像を修正し完成する。どのレベルまで作品のレベルを持って行くかを明確にする

必要があるわけだ。

2. ワークショップ活動は完成された作品をDVDパッケージ化し渡すことで終了する。以後の支援や繋がりをどのようにするかは課題である。

「戦前・戦中のマンガ」

牛田あや美会員（京都造形芸術大学）



現在出版されている漫画史について書かれている本を繙いてみると、いくつかの共通点が見える。その一つに、戦時下の記述がほとんどされていないことである。戦前・戦中に描かれた漫画の多くは残っていない。同時に、戦後大家として活躍した漫画家たちは、戦争協力をした事実を掘り起こしたくない意図があり研究が進まなかったのではないかと仮定している。漢字の「漫画（北斎漫画や北澤楽天らの活躍）」から、カタカナの「マンガ（手塚治虫以降）」と移っていった。映画のモンタージュ技法を利用することより、日本のストーリーマンガへ影響を与え、物語を伝える手段としてのマンガは戦後大きな発展を遂げた。現在「マンガ」といえばカタカナの「マンガ」を指すことが多い。「漫画」から「マンガ」への過渡期こそが戦時下にあたる。そこに描かれる「異国（外地）」の表象を探ることにより、新たな漫画・マンガ研究の視座を見いだすことができるのではないかと考えた。

そこで今回の発表では大日本雄弁会（現・講談社）から出版していた「少年倶楽部」（1914年創刊）、「少女倶楽部」（1923年創刊）の表紙の変遷、さらに掲載されていた外地を描いた作品を中心に発表していった。「少年倶楽部」は台湾の子どもが投稿していた文面、また朝鮮でも読まれていた記録もあることから、日本本土だけではなく、当時の植民地でも読者がいたことがわかっている。田河水泡の『のらくろ』や島田啓三の『冒険ダン吉』など大人気漫画の連載もあり、理想とする男性像を中心とした物語が展開されていることが特徴である。

「少年倶楽部」は創刊号の表紙、大正時代から戦前までの表紙の変遷、戦争が激化してくることで、子どもたちを扇動する表紙へと変貌していく。軍人である東条英機や山下奉文を表紙としたものもあり、当時の子どもたちのなかでは軍人は憧れの人物として表象している。

創刊から昭和20年3月号まではカラーの美しい表紙であったのだが、昭和20年3、4月合併号、昭和20年5、6月合併号、昭和20年7月号と質の低い紙への単色刷りへと一変している。終戦をまたいだ昭和20年8、9月合併号も同じく質の低い紙への単色刷りとなっているが、昭和20年10月号、昭和20年11、12月合併号は、なんとまたカラー表紙へと戻っている。

表紙からも子どもたちへのプロパガンダは明確にわかるのだが、終戦をまたいだ内容の大変革には当時の子どもたちの混乱がみえる。終戦までは「鬼畜米英」を扇動した表紙、内容であるが、舌の根も乾かぬ昭和20年10月号のなかには「アメリカ人に接する日本少年の心がまへ」という小文が掲載され、徐々に漫画を使用した英語教育が掲載される。「少女倶楽部」も同じような行程をたどっており、明らかに占領軍の検閲が入っていることが表紙、内容ともにみとれる誌面づくりとなっている。

今回は戦時下の「少年倶楽部」「少女倶楽部」の表紙の変遷を中心に発表したのだが、今後の課題としては戦中の漫画家たちは、なぜ日本の植民地であった「異国」を描いていたのかを検証していく。ジャパン・ツーリスト・ビューロー（現JTB）が戦前・戦中において植民地への観光旅行を推奨し、本として出版もしている。加えて、日本のデパートでは博覧会と称し、「異国」を紹介、そのイベントに多くの人が集まるという状況があった。戦前・戦中と政府の役人や資産家などは、日本以外の国へ行っていた。大衆は職を求め、植民地下の朝鮮・中国・台湾などへ渡った。それに付随するかのようには漫画家も「異国」で経験したこと、見聞きしたものを描き新聞・雑誌に掲載していた。それらを需要する側はある種の「憧憬」をもって受容していたのではないかと推測している。

『カメラから獲得する〈存在・イメージ・世界〉』を越えて

三橋 純会員 (横浜美術大学)



カメラから獲得する〈存在・イメージ・世界〉¹とは、新しい意識の世界を想定している。J. ボードリヤールは既成概念に囚われないニュートラルな存在、インテグラルな世界と呼ばれる価値世界を、私たちが基軸としなければならない新しいモノやコトの認識の世界として提言した。

ガリレオの望遠鏡の発明をきっかけとし地球外を観察できるようになった事は、逆に地球を俯瞰し地球を考察することになった。人間が地球の内部にいながら、外側から地球上を扱う方法を手にするのである。このとき人類は世界と決定的な分離を果たし「世界を現実性として効力を与えようとして、世界を追放した」とボードリヤールは指摘した。

人間が自己内面の精神世界と外部の現実世界を峻別し、後者を前者の認識の対象とする段階(近代)に達したとき「現実とは概念の中に消え失せた²」のである。

ボードリヤールのいう「現実の消滅」とは、感覚器官が受容した情報を内在し価値や情報と照らし合わせながら、脳が自分流に現代風に再構成した「記号化された現実」だということなのである。

「ニーチェも力説したとおり、認識は、特定の主観の目で遠近法的に見られ描写される絵画に似ている。世界は「心」という絵師が恣意的な形と色で描写した絵画だ。日常生活の場では多くの場合、世界は〈あるがまま〉にみられるというより、われわれが〈見たいがまま〉に評価されているのである。³」

カメラは身体的装置である。何故ならばカメラを持ってゆくという行為の中には、体験を反芻しようとする欲望が内在し、更に過去の事柄を体験の外へ客観的に外在化させようとする願望が内在するからだ。写真にはそういった意識の外在化や物質化が潜む。カメラの本質は先入観や感情など一切記録せぬ即物的に物・事を記録をする装置であるにもかかわらず、人は写真を感情的に扱うのである。「飯を食うのも忘れて面白い小説に読み耽っているとき、はたまた海岸で溺れかけている子供を救出しようとして自分がカナヅチであることも忘れて飛び込むときなど、そこではオレ自身は消え果て、オレが融合している事柄そのもの、世界そのものだけがある、そんなときのオレは自己なんだね。反対に、オレがオレ自身にこだわり、オレを世界に二元的に對置し、したがって、世界をオレに対して対象化するとき、それは自我なんだ。⁴」つまりシャッターチャンスとは、写真家自身を消し、自身が融合していると思われる世界の“事柄”だけを抽出して世界そのものだけがある、という写真家消滅の瞬間なのである。これはボードリヤールのいう「消滅の瞬間」と同義である。

「われわれは絶対的な現実の利益のために、記号と人工物を失ったのだ。現実が幻想や理想、あるいはにせものやコピーに對置される「オリジナルな現実」であることをやめてしまった段階〈限界のないオペレーションなプロジェクトの世界〉では、現実の記号自体が記号性を失ってしまう⁵」。写真家の作業をカメラ装置に忠実に従うとするならば、世界の断片を個人的な感情抜きに収集し、それを極めて冷静な姿勢で再度外界にオルガナイズすることである。⁶ 発表では、これを焦点としながら、写真家の荒木経惟氏、森山大道氏、中平卓馬氏を挙げ、写真家の世界のあり方世界の見え方を提言した。

註

- 『芸術とメディアの諸相 History, Image & Ideas』, 芸術メディア研究会, タイケン, 2013
- 『なぜ、すべてがすでに消滅しなかったのか』J. ボードリヤール, 訳-塚原史, 筑摩書房, 2009
- 『ひとは自我の色眼鏡で世界を見る』加藤茂, 勁草書房, 1998
- 『写真の深淵 ~J. ボードリヤールから存在・イメージ・世界~』制作ノート, 三橋純, 横浜美術大学教育・研究紀要 第3号, p.151-p.156, 2013

発表者プロフィール

森本純一郎

1975年生まれ。日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程映像芸術専攻修了。『読者拡張する者—実写とアニメの融合—』(KAWADE 夢ムック 文藝別冊 押井守)へ寄稿。元東京国立近代美術館フィルムセンター非常勤職員。

河合 明 (河合孝治)

サンタフェ国際電子音楽祭、ISEA 電子芸術国際会議、ETH デジタルアート週間(スイス)、チリ・サンティアゴ国際電子音楽祭「Ai-maako 2006」、ISCM 世界音楽の日々2010(豪)、Opus medium project などで、「Chaosmos」一乗音界図」と言う自らの芸術思想を基にパフォーマンスや作品を発表している。

斎藤 恵

東京藝術大学音楽学部器楽科卒業、同大学大学院音楽研究科器楽・音楽学修了。現在、大妻女子大学教授。音楽学会、音楽教育学会、美学会、美術史学会、日本オルガニスト協会各会員。東京の夏音楽祭、大妻女子大学ヒーリングコンサート、東京女子大学昼休みオルガニスト、北陸学院パイオルガニティコンサート等に出演、O. メシアンに関する論文多数。

李 容旭

2003年より東京工芸大学講師、現在東京工芸大学芸術学部映像学科教授。映像芸術の創造特性や映像と美術の関係に強く関心をもち理論と表現の両面で研究、創作活動を進めている。4年間、メディア芸術・情報美学国際会議を主宰。日本、中国、韓国、アメリカ、イギリスなど国際間の研究者と作家らの出会いをプロデュース。論文「電子メディア時代の映像芸術の創造特性—ナムジュンパイクの場合」他、作品(「お山の駱駝」のために)2013他。

牛田あや美

2006年日本大学大学院芸術学研究科芸術専攻博士後期課程修了。博士(芸術学)。現在京都造形芸術大学専任講師。単著に『ATG 映画+新宿 都市空間の映画たち1』(D 文学研究会)2007、共著に『横溝正史研究2』(光祥出版)2010、『아시아 영화의 오늘 - 아시아 영화 미학과 산업 (アジア映画の今—アジア映画美学と産業)』【한울아카데미 (ハムルアカデミ)】2012、『メディア文化論』(ナカニシヤ出版)2013、他。

三橋 純

広告写真制作プロダクション退社後日本大学大学院芸術学研究科復学。1999年博士課程単位取得満期退学。現在、横浜美術大学映像メディアデザイン研究室准教授。2000年以降国内外にてグループ展及び個展多数。日本映像学会・日本写真学会・日本写真芸術学会所属。



京都造形芸術大学芸術学部校舎見学

[問い合わせ先]

日本映像学会クロスメディア研究会

代表 李容旭

連絡先 〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5

東京工芸大学芸術学部映像学科

lee@img.t-kougei.ac.jp

Tel&Fax 03-5371-2717

運営構成員 三橋 純(横浜美術大学) TEL: 045-962-2221

名手久貴(東京工芸大学芸術学部) TEL: 03-3290-6430

牛田あや美(京都造形芸術大学) TEL: 075-791-9122

(り) よんくく／クロスメディア研究会代表、東京工芸大学芸術学部映像学科)

映像表現研究会

伊奈 新祐・奥野 邦利

「映像表現研究会」報告と計画について

今年度の＜インターリンク学生映像作品展：ISMIE (Interlink=Student's Moving Image Exhibition) 2013＞(第7回)が10月末に東京、11月末に京都でそれぞれ開催されました。今回は、以下のような21校の参加によって、それぞれの推薦作品(各校25分以内に編集(作品数自由)、及び各校10分以内(2作品以内)の代表作を決める)が上映されました。

＜参加校＞

文教大学 情報学部／名古屋市立大学 芸術工学部／東京造形大学／京都精華大学 芸術学部／玉川大学 芸術学部／北海道教育大学／成安造形大学／阿佐ヶ谷美術専門学校 メディアデザイン科／武蔵野美術大学 造形学部／東京工芸大学 芸術学部／早稲田大学川口芸術学校／九州産業大学 芸術学部／大阪成蹊大学 芸術学部／情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]／宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部／名古屋学芸大学 メディア造形学部／多摩美術大学 映像演劇学科／尚美学園大学 芸術情報学部／大阪芸術大学 芸術学部／日本大学 芸術学部／東北芸術工科大学 映像学科

また今後、今回の代表作の中から各校の推薦教員による投票によって「ISMIE2013 学生選抜作品集 DVD」の作成を行う予定です。

以下は、東京会場(担当：奥野)と京都会場(担当：伊奈)での上映会・シンポジウム等の報告の概要です。

＜東京会場＞

日程：10月25日(金)・26日(土)・27日(日)

会場：新宿三井ビルディング 1F 55 スクエア



東京会場は、新宿三井ビル1階のオープンスペース「55 スクエア」にて上映及びシンポジウムを行いました。10/25(金)、10/27(日)は、10:00～18:00に各校25分以内で推薦された全作品を、10/26(土)は、12:30～16:00に各代表作品(10分2作品以内)のプログラムを上映しました。会場については、オープンスペースであったため、外部の雑音が入り込んでしまうことは気になりましたが、新宿三井ビルにオフィスを構えている社会人の方が足を止めて作品をみてくださったのは良いことと感じています。記帳のあった来場者が100名超といった具合で、概ね例年と変わらない様子でした。

10/26(土)17:00からは作品推薦教員による「現在の映像教育とその表現を巡る」シンポジウムを実施しました。当日は台風の直撃が懸念されましたが、幸い進路が逸れ、多くのパネラーにご参集頂きました。



パネラーは、波多野哲朗(映像表現研究会前代表)、伊奈新祐(京都精華大学)、太田曜(東京造形大学)、大山麻里(玉川大学)、川口肇(尚美学園大学)、陣内利博(武蔵野美術大学)、瀧健太郎(早稲田大学川口芸術学校)、竹林紀雄(文教大学)、前田真二郎(IAMAS)及び奥野邦利(日本大学)がモデレーターを努めました。シンポジウムと言うよりは、意見交換会という色合いが強くなりましたが、デジタル化によってもたらされた現在の映像環境と、作者の主体とリアリティの問題を結び付けた議論は、技術やジャンルを超えた、今日的な作品作りのアウトラインを示す良い機会になったと思います。

なお、今回はエプソン販売(株)に会場や上映機材、ポスター掲示の面でご協力いただきました。



(奥野邦利/映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)

＜京都会場＞

日程：11月29日(金)・30日(土)、12月1日(日)

会場：元・立誠小学校「特設シアター」

京都会場は、例年の京都精華大学のサテライトスペース「kara-S」(四条烏丸)が改装されたため、今回、元・立誠小学校の3階「特設シアター」において、＜京都メディアアート週間2013＞のプログラムとして上映・展示を行いました。例年のゲーテ・インスティテュート(ヴィル鴨川)から提供されるドイツ作品(「現代ドイツのアニメーション作品集」2008、「短編作品集」2013)に加えて、日本アニメーション学会&協会を母体とする実行委員会が運営する「インターカレッジ・アニメーション・フェスティバル(ICAF)2013」からの学生アニメーション作品集も同時に上映されました。



元・立誠小学校（建物正面）



対談（細川晋×伊奈新祐）



3階「特設シアター」上映会場

ISMIE 参加各校の推薦作品は、受付横のロビースペースでコンピュータ3台によって視聴できるように設置しました。スクリーン上映では、各校の代表作品を3つのプログラム（各約60分：Vol.1～Vol.3）に分けて上映しました。



視聴ブース（受付横ロビースペース）

12月1日の最初のプログラム（ISMIE・Vol.3）の上映後に、今回同時上映となったICAFのスタッフである細川晋氏（東京工芸大学助教）と伊奈が意見交換（対談：約30分）を行ないました。ICAFも今回21校の参加があり、「各校選抜プログラム」と「実行委員会セレクション」のふたつのプログラムが上映されました。全体として観客は、学生中心でしたが、ISMIEとICAFが同時に見れる良い機会でもあり、例年よりも多くの入場者数（3日間の総計：約250名）となりました。

今後、ISMIE2013の巡回として、1月に名古屋での上映（1月7日～23日）／担当者：名古屋学芸大の瀬島久美子（会員）が予定されています。

「京都メディアアート週間2013」の詳しいプログラム内容は、以下のKINO-VISIONのホームページでご確認下さい。

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/kino/2013/index.html>

（伊奈新祐／映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部）

映像表現研究会

西部会

代表 伊奈新祐

連絡先 京都精華大学芸術学部

住所 〒606-8588 京都府京都市左京区岩倉木野町137

e-mail ina@kyoto-seika.ac.jp

運営構成員

伊奈新祐（京都精華大学芸術学部） e-mail：ina@kyoto-seika.ac.jp

伏木 啓（名古屋学芸大学） e-mail：fushiki@nuas.ac.jp

黒岩俊哉（九州産業大学芸術学部） e-mail：kuroiwa@ip.kyusan-u.ac.jp

東部会

代表 奥野邦利

連絡先 日本大学芸術学部映画学科

住所 〒176-8525 東京都練馬区旭丘2-42-1

e-mail okuno.kunitoshi@nihon-u.ac.jp

運営構成員

奥野邦利（日本大学芸術学部映画学科）

e-mail：okuno.kunitoshi@nihon-u.ac.jp

波多野哲朗（日本大学大学院） e-mail：hatano-tetsuro@nifty.com

加藤 到（東北芸術工科大学） e-mail：kato.itaru@aga.tuad.ac.jp

以上

支部・研究会だより 関西支部

大橋 勝

関西支部では三宅祥雄会員のお世話により、下記の通り関西支部第70回研究会を開催致しました。

日時：平成25年12月14日(土) 午後2時より

会場：大阪大学豊中キャンパス

全学教育推進機構講義棟(旧共通教育講義棟)A棟1階A102

研究発表1：時代劇映画の演出の特色 —山中貞雄を中心に—

発表者：岡田 彰仁会員(大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了)

研究発表2：メディアのスピリチュアルな役割について

—日本と韓国における『ハイジ』—

発表者：朴紀吟(パク・キリョン)会員(韓国中央大学先端映像大学院)

岡田会員の発表は1930年代の山中貞雄の時代劇映画をとりあげ、公開当時の批評とともに検証し、今日的な視点で再検討するものであった。「縦の構図」、T字セットの使用、立体的な人物配置、暗示と省略などの山中演出の特徴がトニー移行期の作品にどのように表れているか、具体的な映像資料とともに指摘された。

朴会員の発表は、ヨハンナ・スピリの『ハイジ』が日本と韓国においてどのように受容されてきたかを、翻訳と出版の形式から考察するものであった。そして高畑勲演出のTVアニメーション『アルプスの少女ハイジ』が、両国共に原作以上に知られており、大きな影響力をもって他メディアにも波及していることが報告された。また日韓の文化的、特に宗教的基盤の差異による受け止められ方の違いが示唆された。両研究とも活発な質疑応答が交わされ、有意義な議論を持つことができました。



研究会終了後同会場にて支部総会が行われ、平成25年度事業報告、会計報告及び平成26年度事業計画案が提案され了承されました。

今後の予定といたしましては、第71回研究会を平成26年3月1日(土)に立命館大学にて、5月頃に第72回研究会を、12月に第73回研究会を開催いたします。また第36回夏期映画ゼミナールの実施を平成26年8月29日(金)、30日(土)、31日(日)の3日間に予定しています。プログラム、テーマ等は現在検討中で、決定次第お知らせいたします。

(おおはし まさる／関西支部担当常任理事、大阪芸術大学芸術学部)

支部・研究会だより 中部支部

和田 伸一郎

中部支部では2013年度第二回研究会を、下記の通り開催しました。

日時：12月14日(土) 15:00～18:00

会場：名古屋文化短期大学C館3階 ハイビジョンホール(C301)
(名古屋市中区)

■スケジュール

・15:00～16:00 研究発表・研究報告

発表者：林桃子会員(名古屋芸術大学デザイン学部非常勤講師)

タイトル：「写真の焦点と注視点からみたイメージの領域」

発表要旨：イメージを見ること、あるイメージとあるイメージが似ていると受けとめること、そこから何かしら気づくことはどういうことか、その理解の仕方や想像性などについて、内容に基づくイメージリトリバルの手法を用いて研究を進めてきた。今回は写真を見る時に人がどのような領域を注目しているのか、焦点と注視点の関係から調査する。アンケートによる実験とイトラッカーを用いた実験の結果からイメージの領域についての考察を行う。

報告者：伏木啓会員(名古屋学芸大学)

タイトル：「映像インスタレーション"waltz / ワルツ」—中川運河におけるアートプロジェクトの報告」

報告要旨：2013年11月8日～10日に中川運河(名古屋市)にて行われたアートプロジェクトについて報告したい。中川運河は、名古屋港と名古屋市中心部を結ぶ、全長約8.2kmの川である。大正から昭和にかけて、工業都市として発展していた名古屋の物流を支えるため、1926年(大正15年)に着工し、7年かけてつくられた。しかし1960年代以降、貨物の輸送形態が水上から陸上へと移行するに伴い、運河を利用する船舶隻数が減り、現在では物流としての役割はわずかなものとなっている。また、運河護岸の建築物も老朽化し、立て直しや修復等の何らかの対策が必要となっている。本プロジェクトでは、中川運河の視覚的な価値を探るため、運河およびその周辺を映像によって記録した。また、映像インスタレーションによるアートプロジェクトとして、映像と実在する景観が重なりあう状況をつくりだし、中川運河の視覚的な豊かさを新たに発見する場を設定した。

・16:00～17:00 講演

堀潤之会員(関西大学)

タイトル：「歴史家ゴダール——『ゴダール・ソシアリズム』再考」

講演要旨：ジャン＝リュック・ゴダールの『ゴダール・ソシアリズム』(Film socialisme, 2010)は、『映画史』(Histoire(s) du cinéma, 1988-98)以降のゴダールの歩みで、まぎれもなく最も力強く、ラディカルで、密度の濃い作品である。本講演では、この作品で演じられているイメージの異種交配の様態にも目を向けつつ、パレスチナ/ユダヤの観念連合を核として、より根本的な次元でいかにゴダールの歴史的想像力が作動しているかを解明する。『映画史』で頂点に達したかに思われたゴダールの歴史叙述の方法論は、この作品で新たな展開をみせることになるだろう。



・17:00～17:30 ディスカッション

・18:00～ 懇親会

■2013年度の今後の計画

次回、第三回研究会は2月下旬に中京大学にて開催し、講演と学生作品プレゼンテーションを予定しています。

(わだ しんいちろう / 中部支部担当常任理事、中部大学)

Image Arts and Sciences 165 (2014) , 13-14

ショートフィルム研究会

林 緑子

2013年度研究会活動助成の交付を受けて、ショートフィルム研究会では下記の内容・日時で企画を開催いたしましたので、ここにご報告いたします。

また、2014年3月末までの活動として、以下4件の開催を計画しています。

開催終了企画の事後報告

第1回活動

会期名 『野ばら』と高橋克雄監督の世界

期日 2013年10月5日(土)

14:00 上映
15:30 ショートレクチャー
19:00 上映

2013年10月6日(日)

14:00 上映

来場者数 31名(延べ)

参加費 無料(別途、要1ドリンク注文)

内容 作品上映、ショートレクチャー

会場 シアターカフェ

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24、マエノビル2階

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

宣伝企画協力 大塚浩平(国際アニメーション協会日本支部会員)

協力 株式会社 東京中央プロダクション、高橋克雄著作権事務所

国内外で受賞歴のある『野ばら』(1978年)や、1978年から10年余にわたって放送されたNHKの「番組のおしらせ・メルヘンシリーズ」で知られる高橋克雄監督のアニメーション作品を特集上映した。また、ショートレクチャーとして、高橋監督のこれまでの経歴と上映作品の解説を、国際アニメーション協会日本支部会員の太田浩平氏にお話しいただいた。

高橋監督は、人形劇の演出からそのキャリアを開始し、テレビの創成期には主として児童番組の脚本や演出に関わってきた。そして、『一寸法師』(1967年)でパペット・アニメーション作品に国内で初めて「画像のプレ」効果を、スピード感を出すため導入した。また、『野ばら』(1978年)では、カナダの陶製兵隊人形を元に、撮影に適した人形を独自で制作した。そして、『メルヘンシアター』(NHK/1980年代～約10年、毎日放映)シリーズ制作中、ビデオとパソコンによるコマ撮りアニメーションシステムを世界で初めて開発した。このように、高橋監督は、コマ撮りアニメーション制作における技術開発を常に行ってきた。

また、『一寸法師』を1967年にカナダの国立映画庁(NFB)で上映した際に、当時NFBに在籍していたノーマン・マクラレン監督が、その手法に興味を持ち、解析のためフィルムを借りた。このように、作品ごとの制作方法に加えて、逸話を交えながら、時系列に沿ったお話を、太田氏にいただいた。戦後の、国内におけるコマ撮り短編アニメーション作品の制作状況と流れの一端を、一人の監督を通じて知ることができる機会となった。

■ショートレクチャー(40分)

期日 2013年10月5日(土)15:30-16:10

講師 大塚浩平(国際アニメーション協会日本支部会員)

■上映作品(90分)

「一寸法師」(1967年/14分)

脚本・監督:高橋克雄、おはなし:桑山正一、音楽:菊川迪夫、
アニメーション:中野健次、製作:庄司洵、日本語ナレーション

「かぐや姫」(1972年/18分)

脚本・監督:高橋克雄、制作:東京中央プロダクション、
英語版・日本語字幕無し

「赤いサラファン」(1984年/2分20秒)

アニメーション:高橋克雄/東京中央プロダクション、
歌:研ナオコ、作詞:津川圭一、編曲:矢嶋マキ

「ピーターラビットの冒険」(1958年/11分)

脚本・監督・撮影:高橋克雄、音楽:菊川迪夫、
アニメーション:中野健次、製作:庄司洵

「ピーターラビットのおるすばん」(1963年/10分)

脚本・監督・撮影:高橋克雄、音楽:菊川迪夫、
アニメーション:中野健次、製作:庄司洵

「アンデルセン・アルバム～ハンス・クリスチャン・アンデルセンの童話から」(4分)

脚本・監督:高橋克雄、制作:東京中央プロダクション
おやゆび姫/人魚姫/マッチ売りの少女/みにくいアヒル

「メルヘンシアター」(5分)

監督:高橋克雄 制作:東京中央プロダクション
赤ずきん(昭和53年度)、ジャックと豆の木(昭和54年度)、
花さかじい(昭和55年度)

「野ばら」(19:00/1978年)

監督:高橋克雄 原作:小川未明 朗読:七尾伶子 音楽:林千尋
製作:庄司洵

第2回活動

会期名 脚本家&監督 井川耕一郎の世界

期日 2013年12月8日(土)

14:00 上映
16:00 レクチャー1
19:00 上映

2013年12月9日(日)

14:00 上映
16:00 レクチャー2
19:00 上映

来場者数 88名(延べ)

参加費 1プログラム(上映/レクチャー共に)500円

内容 作品上映、トークレクチャー

会場 シアターカフェ

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24、マエノビル2階

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

企画宣伝協力 坪井亜紀子

協力 大工原正樹、映画美学校

『ついのすみか』(1986年)びあフィルムフェスティバル入選、『のぞき屋稼業』(監督:後藤大輔/1993年)で脚本家デビューし、映画美学校・第2期から演出・脚本部門の講師を務める井川耕一郎氏の監督作品を上映した。また、井川氏によるレクチャー2件(シナリオ講座/映画分析)も行った。

レクチャー1「悪あがきシナリオ講座 すらすら書けないのは当たり前」では、ご自身の作品『寝耳に水』(1999年/製作:映画美学校)のシナリオを題材として、どのような手順で制作していったかを、資料を引きつつお話いただいた。本作は、映画美学校の講師が監督、学生がスタッフを務め、約30分の作品を作る学内課題として制作された。井川氏は、『冷飯とおさんとちゃん』(監督:田中具隆、原作:山本周五郎)の第2部を作るというイメージで、学生の資料から選んだ要素や、過去の記憶など、複数の要素を関連付けていき、話を膨らませていった。その上で余分な要素をそぎ落とし、最後は出発点に戻り、シナリオを完成させた。そして、撮影段階で出演者に合わせた変更を加えることで映画が完成した。

井川氏は、潜在意識が活性化されている時に良いシナリオができると考えている。作品の方向性を決めたら、潜在意識を触発するようなものを探すとのこと。それらの要素をまとめ、そぎ落とす作業を繰り返すことでシナリオが完成する。どのようにしてシナリオが作られ、映画になっていくのかを知ることができ、映画製作への理解が深まった。

レクチャー2「永遠によそのもの 映画監督・伊藤大輔について」では、時代劇監督・伊藤大輔作品のシナリオを通じて、作品の構造分析を行っていただいた。伊藤大輔は、1898年生まれ。小山内薫に師事し演劇俳優を志していた。松竹キネマで脚本家になれと言われ、当時、シナリオの書き方が国内で確立されていなかったため、自力で考案した。映画『鞍馬天狗』のシナリオには、ト書きの上に○がついており、カット割りの表記ではと、井川氏は推測している。映画はシーンから成り立っており、シーンはカットからできていることが、結果としてト書きの上の○となったのではとのこと。

伊藤大輔の描くテーマは「分身」「身体欠損」「世界の破局」の3つに分けられる。たとえば、『鞍馬天狗』で、目の見えないヒロインが、健常者に読めない文字が

みえるシーンがある。これは、みることの本質を問いかけるために障がい者を出していると推測される。

また、映画には、虚像として現実の分身が映っている。そして、暗闇で視聴すること自体に、人が本能的に恐怖を感じる得体の知れない何かがあると、伊藤は生涯考え続けたのではないかと井川氏は考えている。今後こういう人はなかなか出て来ない、映画の始まりにしか出てこない貴重なタイプとのこと。国内の映画製作初期に関わった伊藤大輔の作品を通じて、映画制作の成り立ちそのものを考察する内容だった。

■レクチャー (各 70 分)

レクチャー 1: 悪あがきシナリオ講座 すらすら書けないのは当たり前
レクチャー 2: 永遠によそのもの 映画監督・伊藤大輔について

■上映作品 (70 分)

「追悼映画 玄関の女」(2011 年/5 分)

自主製作 (オムニバス映画「13 日の金曜日 ジャンルの命日」の一篇)
監督・脚本・出演: 井川耕一郎、出演: 本間幸子、撮影: 松本岳大、
録音: 光地拓郎、製作・編集: 北岡稔美

「弱い魂」(2012 年/11 分)

督・脚本: 井川耕一郎、出演: 本間幸子、三野航、撮影: 謝君兼、録音: 栗山道太、
助監督: 高橋大祐、編集: 北岡稔美、松本万慶

「寝耳に水」(2000 年/34 分)

監督・脚本: 井川耕一郎、出演: 長宗我部陽子、山之内菜穂子、清水健治、
山崎和如、撮影: 大城宏之、録音: 光地拓郎、編集: 浦山三枝、
アニメーション: 新谷尚之、助監督: 浦井崇、佐藤宏紀、
制作進行・編集: 北岡稔美

開催予定の企画概要

第 3 回活動

会期名 名古屋フィルムミーティング 2014(第 4 回)告知・作品募集活動

期日 2014 年 1 月頃～

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

共催 名古屋フィルムミーティング実行委員会

内容 名刺と、告知・作品募集ちらしを制作し、周知活動を行う

主旨 東海地区での学生と一般の映像制作を盛り上げる交流の場として、公募作品による上映会を開催する。

公式 HP http://filmm.info/nfm_main/

第 4 回活動

会期名 平成 24 年度文化庁芸術振興費補助金助成対象作品

(短編アニメーション部門) 紹介企画

「アニメーションと絵本とお茶とお話しと。」

期日 2014 年 2 月 22 日(土)、23 日(日)

両日 15:00～

参加費 無料(別途、要 1 ドリンク注文)

内容 作品上映+レクチャー

会場 シアターカフェ

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目 32-24、マエノビル 2 階

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

協力 鳥居なつみ、吉村桜子

主旨

短編アニメーション作品制作を仕事と自主制作で行っている三角芳子氏の活動を紹介します。平成 24 年度文化庁芸術振興費補助金 助成対象作品「ある朝目がさめたら足が木になっていた。」の初上映を含め、短編のアニメーションや絵本の制作について、仕事と自主制作の両方で制作していくことについての講演を行う。また地元で活動する若手制作者(学生、一般で計 2 名)との対談も設ける。

■三角芳子プロフィール:

1978 年福岡生まれ。東京藝術大学美術学部染織科卒業。同大学院修了。在学中に短編アニメーションの世界に出会い、アニメーションをつくりはじめる。卒業後デザインの仕事で仕事をしながら、NHK(教育)で切り絵アニメーション「王さまものがたり」シリーズ制作を始める。同作品で文化庁メディア芸術審査員推薦作品(2007,2008)。2008 年新設された東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻入学。2010 同大学院卒業。

<アニメーション作品>

仕事: みんなのうた、おかあさんといっしょ、プチプチアニメ「王さまものがたり」など
自主制作: 「Googuri Googuri」(2010.2)、「MOSQUITONE」(2011)、「ある朝目がさめたら足が木になっていた。」(2013) など

<絵本作品>

「魔法の庭へ」日向理恵子 作/三角芳子 絵/童心社/2010.2

「きみのきもち」サトシ、相田毅 作/ミスミヨシコ 絵/教育画劇/2010.8

「おかあさんどこ? 穴あきしかけ紙芝居」ミスミヨシコ 作・絵/教育画劇/2011.1

「わいることがしたい!」沢木耕太郎 作/ミスミヨシコ 絵/講談社/2012.4

「ちゅーとちゅーのくだものさがし」ミスミヨシコ 作・絵/教育画劇/2012.9

第 5 回活動

会期名 「早稲田大学アニメーション研究会」研究(予定)

期日 2014 年 3 月

内容 上映+トーク(座談会形式)

会場 シアターカフェ

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目 32-24、マエノビル 2 階

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨

一般大学の一サークルながら、学年を跨いだシステムチックなグループ制作と技術継承を行い、商業アニメーション業界への就職者を輩出している早稲田アニメーション研究会について、その歴史と活動を関係者の話や作品上映を交え紹介する。

第 6 回活動

会期名 映像ディレクターによるトークレクチャー(予定)

期日 2014 年 3 月

内容 上映+トークレクチャー

会場 シアターカフェ

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目 32-24、マエノビル 2 階

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨

MV など尺の短い映像作品を制作する商業ディレクターに、その来歴と制作方法、起業し制作を続けていくことについての話を伺う。

以上

(はやし みどりこ/ショートフィルム研究会代表)

ショートフィルム研究会

代表 林 緑子

連絡先

アニメーション上映活動団体「animation tapes」

映像上映スペース「Theater café」

住所 〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目 32-24、マエノビル 2 階

TEL 052-228-7145

e-mail midoriko@theatercafe.jp, animationtapes@gmail.com

運営構成員

池側隆之(京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科デザイン学部門)

曾我部哲也(中京大学情報理工学部)

日本映像学会 第40回大会第1通信

大会実行委員長 仲本 賢

会期：2014年6月7日(土)、8日(日) 大会

6月9日(月) エクスカーション

会場：沖縄県立芸術大学 首里当蔵キャンパス

〒903-8602 沖縄県那覇市首里崎山町1丁目4番地

TEL: 098-882-5000 (大学代表/教務学生課)

TEL: 098-882-5072 (デザイン専攻)

FAX: 098-851-5156 (デザイン専攻)

E-mail: design@okigei.ac.jp

URL: http://www.okigei.ac.jp/

(第40回大会公式 web サイト及び専用 E-mail アドレスを開設予定)

研究発表・作品発表の申し込み：2014年3月中旬締め切り予定

プログラム及び大会参加・発表申し込みの詳細は、追って(大会第2通信)にてお知らせ致します。なお「大会第2通信」は、2014年2月初旬公開予定です。

発表申し込みの際、同時にレジュメの提出が必要となりますので、早めの準備をお願い致します。

大会テーマ：「南島、内なる現実、外からの幻想」(案)

○特別講演：「小さな島を映像に置き換える」(案)

(講演予定：沖縄県内映像作家)

○シンポジウム：「映像表現に見る外界からの沖縄のイメージ、誤った日本のイメージ」

パネラー：沖縄県外映像評論家、県外映像評論家(4名)を予定。

○エクスカーション(9日)：大会第2通信にてご案内予定。

実行委員会：

委員長 仲本 賢 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻教授)

副委員長 東 英児 (映像研究家・那覇市繁多川公民館)

委員 又吉 浩 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻講師)

崎濱秀昌 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻教授)

北村義典 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻教授)

座波嘉克 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻教授)

赤嶺 雅 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻准教授)

笹原浩造 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻准教授)

翁長洋子 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻講師)

我如古 真子 (美術工芸学部・デザイン工芸学科・デザイン専攻助手)

編集後記

総務委員会

■新年明けましておめでとうございます。■次回大会のお知らせをご覧の通りです。皆様万障お繰り合わせ頂いてご参加を！■並びに今会報には新たな研究会登録や研究会活動助成費などの掲載があり、各支部や研究会の活発な活動で紙面一杯です。■新年もご一緒に日本映像学会の益々の発展に寄与致しましょう。(遠藤)

「沖縄県立芸術大学」について

沖縄県立芸術大学は日本の最南に位置する公立の芸術系大学で、昭和61年(1986年)に沖縄県那覇市首里に開学しました。

県立芸術大学を建学する基本的な精神は、沖縄文化が造りあげてきた個性の美と人類普遍の美を追究することにあります。そのためには、地域文化の個性を明らかにし、その中に占める美術・工芸、音楽・芸能等さまざまな伝統芸術の問題に積極的かつ具体的に取り組み、その特性を生かすことでなければなりません。

大学は大きく、美術工芸学部(絵画、彫刻、芸術学、デザイン、工芸)と音楽学部(声楽、器楽、音楽学、琉球芸能)の2学部と、大学院修士課程(造形芸術研究科、音楽芸術研究科)と大学院後期博士過程(芸術文化学研究科)に分かれ、学部総定員420名、大学院総定員69名の比較的少人数の大学です。

今回大会を運営させていただく「デザイン専攻」は、美術工芸学部デザイン工芸学科に属していますが、本専攻の中では、プロダクトデザイン(生活デザイン・産業デザイン・環境デザイン)、ビジュアルデザイン(グラフィックデザイン・エディトリアルデザイン・映像デザイン)を展開しており、現代アートとしての映像よりも、商業・エンターテインメント系、もしくはデザインの見地からアプローチする映像表現研究を重点的に行ってきました。

今回大会をお引き受けするにあたり、専門分野の人材が少ない中で、大会を盛り上げることが出来ますように、全力で取り組んで参りますので、参加される皆様のご協力、ご鞭撻など宜しくお願い申し上げます。

(なかもと まさる/日本映像学会第40回大会実行委員長、沖縄県立芸術大学)

